

六花

2009

平成21年

俳句雑誌 りつか
chairman Yamada Rokko
secondary c. and the
editor in chief Kotori
cover designed by little bird

12月号

たん
丹

齒朶

山田六甲

や 破れたる猪垣に毛玉かな

め 女滝まで数歩のところ水涸るる

る 留守番を松手入れせる親方に

り 竜の玉転がりきたる掌

ゆ 温泉ゆげむりの汀へ寄れる紅葉鮎

う 牛の背に湯気立ちぬたる時雨あと

を 惜しげなく兄にも飴を七五三

さ 沢渡る猿の振り向く息白し



が硝子拭く雑巾の音霜の朝
さ寒がりのもう一番と指相撲
ずずれゆくをもどす一声鴨の陣
に逃げこめる女狐の尾の流れけり
や山芋を糲殻箱に埋めおく
め目を洗ふごとくに湯気やふくと汁
な何個でもお代り自由寒卵
い猪と目を合さぬやうにしてをりぬ

や 柳 散る 水の 流れを 従へて

め めりめりと 音立て 大根引き ぬたる

る のやうな 子の宛 名字の 喪中状

り 栗鼠の 目にストーヴの 火の潤み たる

ゆ 湯豆腐 やあるか なきかの 浮き沈み

う 浮雲 や青く 冴えたる 空深く

を 少女^{おとめ}等 を飾り 続ける 白き息

さ さやさやと 揺れ並び ある 葱畑



が
が
なり
合
ひ
肩
組
み
歳
晩
梯
子
酒

さ
桜
枝
の
埃
の
如
く
帰
り
花

ず
ず
く
ず
く
と
地
下
足
袋
沈
め
蓮^{れんこん}
根
掘

に
肉
汁
の
薄
朱
を
吸
へ
る
皿
の
芋

や
焼
跡
に
散
り
て
は
積
も
る
紅
葉
か
な

め
目
に
赤
き
光
走
ら
せ
馳
な
る

な
泣
く
ほ
ど
の
事
で
も
あ
ら
じ
温
め
酒

い
色
菊
の
か
た
ま
り
咲
く
は
穢
か
り

月光の中に伏目の面かな

笹村政子

げっこうのなかにふしめのおもてかな ささむら まさこ

盆踊手荷物ひとつ預かりて

盆舟を抱いて国道渡りけり

秋蝶の止まりて花の色変はる

朝顔の蔓を緩めず乾びけり

面とは能面のこと。能面の代表的なものは小面（こおもて）。光と影と観る角度によって、同じ面でありながら、その表情は変化する。また、観る人の心も微妙に投影される。十五夜に晴れ無し、というように、月の光が一定しないから面の表情も刻々変わる。伏し目に見えた瞬間を捉えて詠んだ。能楽用語に、「照らす」、「曇らすがあり」、「照らすは喜び、曇らすは悲しみを表す。また光の照度により、顔の色も違って見える。この場面は曇らすである。

星月夜

貝森光洋

北国に空の不夜城星月夜
仕舞風呂落とす頃なり蚯蚓鳴く
もの想うヒトの胡桃の鳴り止まず
秋の暮影が長さを競い合う
濁酒どぶろくは母の温もりほどがよい

日暮

梶浦玲良子

杉きりり洩れ日に鹿の声ともる
実石榴や締切り迫る肺活量
干柿のおほほおほほに日暮くる
かまつかの一本が先づ飛ぶ構へ
かなかなやいくら責めても日は帰る

せつ じゅう しゅう
雪 樹 集

影法師

永田 勇

茄子の馬片足浮いてをりにけり
盆支度鬼籍の人を書き出しぬ
後の事子に聞かせつつ墓洗ふ
天高し糶を取り巻く子供達
身に入むや引き摺り歩く影法師

秋 桜

池崎るり子

竿と網同時に動き鮎をどる
飛魚や静かに板の鰭青く
供へものついでみ空へ秋彼岸
赤とんぼ墓参済ませし石畳
秋桜乙女の色とおもひけり

蛍雪譚 六甲

北国に空の不夜城星月夜

貝森 光洋

天と地を逆転させて不夜城のように早で賑やかな空を詠み、北国では夜空が賑やかであればあるほど、地上の深閑とした寂しさがつのると表現した。

星月夜（ほしづきよ・ほしづくよ）とは星明かりの夜のこととで、秋澄み切った月の無い空に満点の星がかがやいて、月夜のごとく明るく明ることをいい、不夜城とは夜も日が出て明るかったという中国東萊郡不夜児の城の名。現代では灯火が輝いて、夜も昼のように明るく賑やかな所で歓楽街などという場合が多い。

かまつかの一本が先づ飛ぶ構へ

梶浦玲良戸

かまつかは鶏頭の古名で、掲句の場合、雁来紅（葉鶏頭）をさし、雁の渡ってくる頃色づくのでこの名があり、もっぱら葉を鑑賞する。秋になって飛来する雁に呼応するように、飛ぶ構えをしていると感じ、取ったのであろう。他に、かまつかは、露草・鎌柄（盆栽仕立てに好まれ、秋に赤い実がつく。別名牛殺しともいわれこの木を曲げて牛の鼻輪などにする）・淡水の砂底に棲む魚などでもあるが、俳句では主として葉鶏頭。

六花集

六甲選

大内 幸子

人呑みし川と思へず曼珠沙華
サンダルは片方ばかり出水痕
壁落ちて木舞に射しぬ今日の月
水害は昨日のことよ大根蒔く
針山を作ることより出水痕

五ヶ瀬川流一

水彩の如くに秋の棚田風
秋麗や長谷の棚田に身を染めて
道の駅秋をひろげて売りにけり
真向かひに棚田まぶしき秋日和
長谷川の水透きとほる秋の風